

あのマチ
あのムラ
・地域おこし活躍中

No56

中標津町の事例

— 豊かな酪農郷を目指すマチ中標津町 —

一・空港のある街 中標津町

中標津町に行くため、札幌駅から丘珠空港に向かった。丘珠から中標津までの飛行時間は一時間足らずである。中標津町から東京へは直行便で二時間。釧路市へは車で一時間ぐらい、広大な大地に広がる中標津の街も空港のすぐそばにある。辺境の

町と言われていた頃もあった。六〇度の視界が望める開陽台、現在の中標津町は昭和二年（一九四六年）に標津町から分かれ、海に面しない根釧原野の中心地というべきところに人口二四、〇〇〇人、世帯数一〇、五〇〇のミニ中核都市を形成している。街並は標津川の流れに沿って細長く伸びて街のシンボルであるシラカバが町並みに美しく調和している。町の高台には、三



高台からの中標津町の町並み

表1 北海道・根室管内に占める中標津町農業

項目	単位	北海道	根室管内	中標津町	根室市	別海町	標津町	羅臼町	摘要
総土地面積	ha	3,845,533	354,003	68,498	51,259	132,016	62,446	39,784	北方領土494千ha
農家戸数	戸	52,451	1,612	371	137	912	178	14	2005農林業センサス
基幹的農業従事者数	人	115,268	4,317	1,038	327	2,424	491	37	2005農林業センサス
種類別耕地面積	総面積	ha	1,162,000	110,797	24,600	9,650	63,600	12,200	747
	てんさい	ha	66,000	160	139	—	—	21	—
	馬鈴しょ	ha	56,900	511	511	—	—	—	—
	夏だいこん	ha	2,850	76	76	—	—	—	—
家畜の飼養	乳用牛	戸	8,310	1,518	342	120	881	164	11
		頭	836,000	183,530	41,600	12,500	107,800	20,900	730
	24ヵ月以上	頭	515,000	113,380	25,500	8,010	66,200	13,200	470
		頭	321,000	70,150	16,100	4,490	41,600	7,700	260
	肉用牛	戸	2,980	144	44	20	67	13	—
		頭	474,200	22,670	5,270	510	12,200	4,690	—
	肉用種	頭	135,900	4,970	1,140	280	2,530	1,020	—
頭		338,300	17,700	4,130	230	9,670	3,670	—	

資料：中標津町経済部農林課資料より。

とおりである。特徴としては、酪農業（生乳生産量一八四t）が中心であるが、てんさい・馬鈴しょ・夏だいこんの作付も一部にみられ、近年ではブロッコリーも作られている。また、周りには貴重な動植物が生息する豊かな自然が残されている。世界遺産に登録された知床半島、丹頂鶴などが飛来する阿寒湖・摩周湖・風連湖、神秘を感じさせる尾岱沼トドワラ。サーモンが群来する根室

海峡をはさんで近くて遠い北方四島 齒舞、国後、択捉、色丹）がある。そもそも、筆者が中標津の存在を認識したのは、映画「遙かなる山の呼び声」であった。牧場から仰ぐ山々の風景が美しくその感動は今でも強く残っている。中標津はよく映画のロケ地になっており、最近では、「釣りバカ日誌」のロケが行われたとのこと。

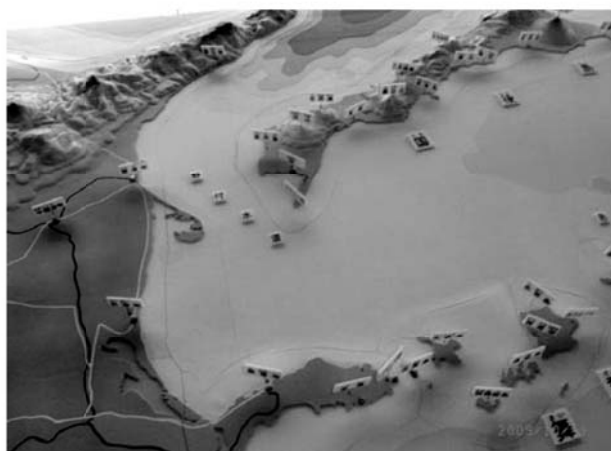
二・中標津町の礎となつた根室農業の歴史と概要

中標津町は、先人が苦難とともに開拓し、いまでは酪農王国とまでいわれる道東農業の一大拠点となつた。これまでの開拓の道筋は、過酷なまでの自然と開拓者との血と汗と涙の戦いの歴史でもあつた。

根室開拓のはじまり

宝歴四年（一七五四年）に高田屋嘉兵衛が初めて納沙布の航路を開き、この年に松前藩が国後場所を置き、運上屋（租税徴収所）を根室に設けたのが根室の歴史の始まりとされる。そして明治二年（一八七二年）に松本十郎判官が百余名の移民を率いて根室に赴任し、開拓使根室出張所が置かれ本格的な開拓が始まる。

根室の農業は、開拓以来、穀菽（マメ類）農業中心であつたために、冷害・凶作との闘いであつた。明治八年（一八七五年）には開拓使が根室村に牧畜場を開設し官馬を放牧したこと



中標津町役場のケースに設けられている道東ミニモデル

がこの地での畜産の始まりとされる。

その翌年には、七重勸業試験場から国産牝牛四頭、洋種ハイグレード牝牛一頭を移して種牝牛としたのが畜産の起源とされる。明治十一年（一八七八年）に初めて、現根室市街で牛乳が販売されている。

その後、官営施設の民間払い下げと資本家の台頭、さらに明治三十年（一八九七年）の北海

道国有未開地処分法の施行によつて、いわゆる大牧場が出現している。

ちなみに中標津の未開地へは、明治四四年（一九一四年）に乾定太郎を団長とする徳静団

明治十九年から二年にかけて、根室

の和田屯田兵村に四〇戸が入植し、穀菽農業と馬産が開始された。明治三十年代からは運搬用、駆用として根室馬産が大いに繁栄し、根

釧奥地に開拓者達が旅立つ始点であつた厚床には当時東洋一と言われた家畜市場が創設された。

その後、官営施設の民間払い下げと資本家の台頭、さらに明治三十年（一八九七年）の北海

道国有未開地処分法の施行によつて、いわゆる大牧場が出現している。

ちなみに中標津の未開地へは、明治四四年（一九一四年）に乾定太郎を団長とする徳静団

（主として徳島と静岡）一三戸

四〇名が現在の依橋十一線付近に入植し、それが中標津農移民の嚆矢であつたとされる。

なお、この頃の畜産は、馬産と酪農を並行的に行う方式でどちらかという「肉主体・乳副次」の酪農であつた。牛の種類もエアシャー、ショートホーンが多く、ホルスタインは僅かである。経済的には楽ではなかつた。

明治末期から大正にかけて、経済不況の影響をまともに受け、肉牛価格の暴落・凶作などによつて、大牧場も経済破綻するところも多かつた。この間、

「北海道拓殖計画」によつて移民が進み、沿岸部から内陸部への開発が進んだが、そば・麦・豆・馬鈴しょを主体とするいわゆる穀菽農業とこれにプラス乳牛の混同経営が多く、現在の農業形態とは異なつていた。

その後、戦争の勃発により生産拡充・農産物提供運動が展開される中で、昭和十六年（一九四一年）に太平洋戦争に突入した。この年に本道全体が冷害を

穀菽農業から根室酪農へ

特に昭和七年（一九三二年）

は、大晩霜によつて農業は壊滅的な被害を受け、官民挙げての救済対策、そして、昭和八年（一九三三年）に道が制定した「根釧原野開発五カ年計画」によつて、農業は主畜農業へと大転換することになる。即ち酪農主体への道を選択することになり、各地に乳牛の導入が盛んになった。この計画は根室地域における酪農の基礎を築くことになった。その結果、成牛五、五〇〇頭、農耕馬一二、〇〇〇頭

その後、戦争の勃発により生産拡充・農産物提供運動が展開される中で、昭和十六年（一九四一年）に太平洋戦争に突入した。この年に本道全体が冷害を

その後、戦争の勃発により生産拡充・農産物提供運動が展開される中で、昭和十六年（一九四一年）に太平洋戦争に突入した。この年に本道全体が冷害を

受け、根室地方は、昭和八年（一九三三年）以来、努力を重ねてきた主畜農業経営が破綻の一步前まで追い込まれている。

昭和二十年（一九四五年）から実施された、「北海道緊急開拓事業」によって農業は再び復興への道を進む。特に開発が遅れていた地域を中心に戦後入植がすすめられ、昭和二十一年から二八年までの入植者は二、九八七戸で、実際に定着したのは一、八九二戸の六二％であった。特に終戦直後は、農業未経験の入植者の離農が目立ち開拓の厳しさを物語っている。

根釧パイロットファーム

漸進しつづつあつた酪農が今日にみるような飛躍的發展の契機となつたのは、この地域が「集約酪農地域」に指定され、昭和三十年に開始された世界銀行の融資による、昭和三十一年（一九五六年）の「根釧パイロットファーム」事業の開始である。その方式は、それまでの畜力開墾と違い、重機械導入による画期的なもので、昭和三十九年（一九六四年）までに五、〇〇〇haを開墾している。入植者には一七〜一八haの土地を与え、ジャージー種が導入され、一〇頭の搾乳牛で年間一〇万円の粗収入をあげる経営を目標としていた。

昭和十九年（一九四四年）、北海道で最初の牛の人工授精所が中標津町に完成したが、これが今日の根室酪農の發展の礎となつた。授精所での種付けから、輸送授精、サブステーション施設へと飛躍的に授精頭数が増加

ぼる資金が投入され昭和三十一年（一九三九年）まで三六一戸が入植している。しかし、オーストラリアから導入されたジャージー種は長距離輸送による栄養低下のため体調不良なものやブルセラ病に感染していたものもいたことから、この病気が大発生したり、天候不順による販売作物の減収、生産資材、消費者物価の値上げ等により、経営間格差は広がり、昭和四三年（一九六八年）までに六八戸が離農するといふ厳しいものとなつた。

新酪農村建設事業

昭和四一年（一九六六年）には、加工原料乳不足払制度が発足するとともに、「第一次酪農近代化計画」が樹立され、集送乳の合理化、バルククーラー整備等の経営の近代化・合理化を

めざす体制づくりがなされた。その後、昭和四八年（一九七五年）にかけて、根室市、別海町、中標津町の区域で、農地五〇ha、搾乳牛六〇頭を目標とした「新酪農村建設事業」が行われた。約一五、〇〇〇haの農地造成、農業用排水九〇五km、道路三七三km等と二〇〇戸以上の入植が行われ、先進的大型酪農経営が展開されるようになった。

酪農王国への道

今では地域の不利条件を克服し、酪農という優れた世界を築き挙げている。現在のこの地域における酪農は、日本一の規模となり、フリーストール、ミルクングパーラー、ロボットまで導入する等、経済的に安定した良質な牛乳生産地域となつてい

表2 フリーストール・ミルクパーラーの導入農家数

区分	年度	調査年		月	農家数	ミルクパーラー		フリーストール		フリーストール・ミルクパーラー		搾乳		
		導入農家	普及率%			導入農家	普及率%	導入農家	普及率%	導入				
根室	1994	平成6	*	*	*	2,000	119	6.0	140	7.0	*	*	*	
	1995	平成7	*	*	*	1,920	137	7.1	171	8.9	*	*	*	
	1996	平成8	*	*	*	1,860	154	8.3	185	9.9	*	*	*	
	1997	平成9	*	*	*	1,810	178	9.8	205	11.3	*	*	*	
	1998	平成10	*	*	*	1,770	187	10.6	212	12.0	*	*	1	
	1999	平成11	1999	平成11	12	1,750	199	11.4	227	13.0	189	11	3	
	2000	平成12	2000	平成12	12	1,720	228	13.3	267	15.5	226	13	3	
	2001	平成13	2002	平成14	2	1,660	259	15.6	290	17.5	252	15	5	
	2002	平成14	2003	平成15	2	1,620	278	17.2	316	19.5	273	17	7	
	2003	平成15	2004	平成16	2	1,506	298	19.8	336	22.3	291	19	10	
	2004	平成16	2005	平成17	2	1,468	310	21.1	348	23.7	306	21	13	
	2005	平成17	2006	平成18	2	1,437	319	22.2	352	24.5	316	22	16	
	2006	平成18	2007	平成19	2	1,414	320	22.6	357	25.2	318	22	19	
	2007	平成19	2008	平成20	2	1,389	325	23.4	366	26.3	325	23	20	
	釧路 宗谷 十勝	2007	平成19	2008	平成20	2	1,057	239	22.6	239	22.6	238	23	20
		2007	平成19	2008	平成20	2	633	64	10.1	64	10.1	61	10	6
		2007	平成19	2008	平成20	2	1,591	394	24.8	464	29.2	392	25	32
北海道	2007	平成19	2008	平成20	2	7,536	1,374	18.2	1,497	19.9	1,366	18	111	

資料：北海道農政畜産振興課「北海道酪農・畜産関係資料」各年より。
注）畜産振興課調べ。農家数は農水省「畜産統計」。表中の*は項目なしを示す。

表2は、主
酪農地域にお
けるフリースト
ール等の導入
状況である。
中標津町だけ
での普及率は
フリーストール
で四二・六%、
ミルクパー
ラーで四七・七
%とほぼ半分
まで進展して
きている。
しかし、長期
化する乳牛計
画生産と消費
拡大策、低迷
する乳価、B
SEの発生、
グローバル
化による影響
等、次から次
へと酪農王国
をおびや

かす事態が生
じており、克
服すべき課題
は常に存在し
ており、言っ
てよい。
三、中標津
町農業を支
える農協の
現状と課題
町には、中
標津町農協
と計根別農
協があるが、
両方とも生
産基盤は酪
農中心であ
り、消費動
向の推移や、
諸外国から
の輸入圧力
に屈すること
なく組合員
生産者の先
頭に立つて
活動を展開
している。
組合員の経
営状況をみ
ると、フリス
トール、ミ
ルクパーラ
ー等の大型
機械化、放
牧酪農、コ
ントラクタ
、TMR等に
よる経営の
外部化など
いろいろん
な生産方式
や経営形態
が出現して
いる。
そんな中、
多様な形態
に対し、

今後の農協
による支援
のあり方が
どうあるべ
きかなど、
深刻に考
えなければ
ならない岐
路にたつて
おり、組合
員や農協、
あるいは地
域にとつて
「あるべき
酪農の姿」と
は何かが問
われている
ように感じ
られるので
ある。
なお、図は、
中標津農協
における戸
数、組勘収
支状況を表
したもので
ある。
また、中標
津町農協で
は平成二十
年度より他
農協にはな
いユニーク
な部署が設
置されている。
それは「地
域コミュニティ
推進室」であ
る。活動内
容は、グ
リーンツー
リズム、後
継者結婚
対策、お嫁
さん悩み対
策、労働対
策、健康増
進対応など
である。
特に経営主
や後継者の
パートナー
となる配偶
者（お嫁さ
ん）対策は
とても重要
なことであ
り、農協で
はこれを重
点課題とし
ていること
である。

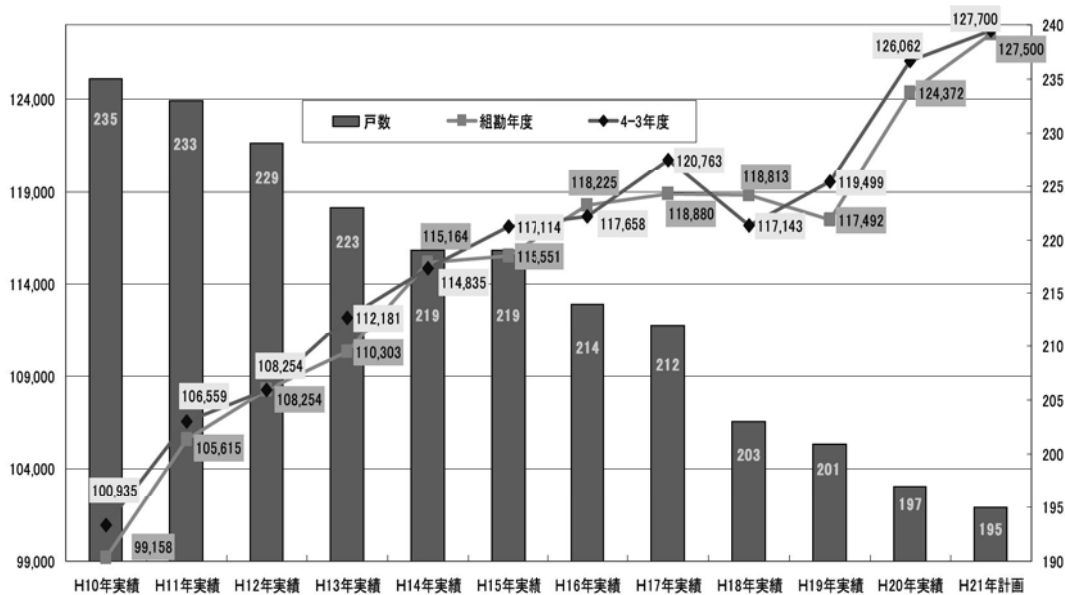


図 中標津農協生乳生産量の推移

単位：戸、万円

資料：中標津町農協より。

注) 網掛けは組勘支出を表している。

四・ミルクーナ町 中標津町

牛乳の消費拡大策として中標津町では、ミルクを使用した食事メニューなどを創作し、その普及に努めている。

第一弾の「中標津ミルクラーメン」は、中標津町の飲食店十一店舗が、地元産牛乳をスープに使ったラーメンである。

ラーメン一杯に中標津産牛乳を100cc以上使うなどの条件をつけ、各店がそれぞれ趣向をこらして提供するというものである。町・農協・飲食業者等で構成される製作委員会が企画し、町ぐるみでそのPRに努めている。

第二弾は、「ミルクーナカレー」である。中標津町の食堂組合三〇店舗が、「ミルクーナカレーはマチの味」として地元の

牛乳や野菜を使い提供するというものである。「なかしべつ牛乳使用」ののびりを立ててPRしている。価格は五〇〇円と低価格に抑えている。一見クリームシチューに見えるが味はとておいしくお勧めメニューである。さらに、観光協会では、開陽台などで塩味やカレー味にしたラーメンパックを観光客に販売好評を博している。

また、中標津町農協では、写



中標津町農協の
取扱商品



真の商品を取扱い、牛乳、チーズ、バター、ヨーグルトなどの消費拡大に努めている。いもは一般に知られている「男爵」ではなく「伯爵」としているところがユニークでおもしろい。

中標津町農協の長淵部長は「中標津農協での商品は、もともと病害虫など極めて少ないところなので、そこで作られる食品はエコ商品といえるもので、自信をもって推奨する」と力強く語ってくれた。

五・農業高校生が

そば打ち体験

計根別にある町立中標津農業高校と計根別農協とで「手打ちソバ加工体験食育交流」が開かれている。同校の生産技術科・食品ビジネス科生と教諭、農協

関係者（佐藤良文参事など）が参加して行われた。同校にいるそば打ち初段取得者より指導を受け、ソバ打ち体験とその試食が主なメニューとなっている。そこには、生徒が授業で生産したニンジン・長ネギ・カボチャなどの食材が添えられている。



町立中標津農業高校



町立中標津高校
中島恵教諭
(酪農学園大卒)

教諭である中島恵さんは、授業で農業体験をとり入れた学習を指導している。それは、「生徒が地元農業に触れ実際に体験することによって、地元の良さを知り、地元食材や農業への関心が生まれるから」と明るく語ってくれた。

近年、若者が農業の良さを理解せず、進学という名のもと地元を離れ、卒業後、他産業に就いてしまっている現状がある。

農協と地元の若者達が一体となって、地元で採れる食材を使い、体験交流することの重要性の意義がここに内在している。

中標津町は、他町村とくらべて都市機能としての空港、文化、医療、学校教育施設や道立農試など恵まれているものの、欲をいえば学際的な教育・研究拠点として大学があつてもいいのではと感じたのである。

六・中標津町の農村 女性が織り成す世界

中標津農協女性部は現在一〇二名おり、既に五十年以上の歴史を有している。実践活動の主なものとしては、「女性部だより」の発刊と仲間づくり、健康と文化推進、他組織との連携、勉強会、研修会等への参加などの活動をおこなっている。農協青年部（六八名）とも連携をとりながら町のイベントなどに積極的に参加し、中標津町行事を支える中核的組織の一つとなっている。

また、中標津町農協のすぐ側に加工体験室を有する農業農村交流施設（愛称クレエ）があり、農村女性がメンバーの地元食材を使った創作メニューづくりなどを行っている「食品加工交流



農業農村交流施設（愛称クレエ）での試食会

ゴマせんべいである。

ここでの女性達の活発な活動を見、その声を聞くにつけ、やはり酪農経営を支え、さらに地域を元気づけるのはチャレンジ精神に富んだ「カアチャンパワ―」が不可欠の要素であると実感させられたのである。

おわりに

中標津での最近トピックスといえは丘珠空港問題である。

鉄路がない中で、全日空が中標津との丘珠発着便をなくし、新千歳空港に置き換えるというものである。中標津に限らず遠隔地にとつては空港問題は深刻な問題である。とりあえず便数等は現行と同じに確保される見通しとのこと。航空会社の合理化と利益確保のために、地域の

利便性を奪うことは絶対あつてはならないことである。

中標津町役場の西村部長は、「空港問題はもちろんだが、食料基地問題など一地域の問題として捉えるのではなく、北海道としてどうすればいいのかなど、もつと幅広い視野で、すなわち北方圏としてどう有るべきかを真に考えるときに来ているのではないか」と述べているがまさに至言である。

今、北海道では、医療施設ばかりでなく、少子化により小高いの統廃合が進んだり、また北海道の地域社会構成の主体である農林漁業経営体が減少し続けている。

中標津のように、自然と調和して国民に安全で安心できる食料を供給している町々、村々を大切に存続させることが、北海道として今まさに求められてい

ることではないだろうか。

【注記】

1) 伝成館には、「NPOコンシェルジュなかしべつ」という組織があり、中標津町の歴史を記録・研究、子ども教育、新規就農者支援などの活動をしている組織がある。そこで今回、中標津町の取材に対し、貴重な資料などところよく協力していただいた、飯島理事、岩野氏、糸氏いとど氏には深く感謝申し上げます。

今回の執筆にあたりまして、中標津にはじめて入植・開拓にあつた乾定太郎氏の子孫である中標津町農業協同組合乾参事にご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

(社)北海道地域農業研究所

特任研究員 中山忠彦